

根本正顕彰フェスティバル

令和4年度は五台地区まちづくり委員会との共催で開催しました。コロナ禍のために延期されたものですが、根本正の生き方を今に生かすためにも、学び続けることが大切であると考えます。開催準備等ご尽力いただきました五台地区まちづくり委員会の皆さん方に厚くお礼申し上げます。

フェスティバル内容

- 1 日 時 令和4年8月28日（日） 13：30～16：00
- 2 会 場 那珂市ふれあいセンターごだい 多目的室
- 3 参加者 40名



4 内 容

- (1) 開会のことば 根本正治副会長
- (2) あいさつ

- ① 五台地区まちづくり委員会 委員長 増子健一氏



根本正先生生誕170年の意味合いを込めて、生誕地五台で開催できることを喜びとする。三班五台小学校を訪問したところ、校長から根本正先生の生き方から「忍耐」「感性」「思いやり」「実行力」などに学ぶ教育を進めている旨をうかがい、喜びとした。地区としてもこの心を共にしながら地域の発展を期していきたい。

② 山田正巳会長



当顕彰会は平成9年に発足して以来、会員はもちろん関係者の努力を以て今日まで活動を続けてきた。まちづくり委員会のご協力の下、ここ根本正先生生誕の地でフェスティバルを開催できることは、今後の会の発展のためにも大きな力となる。

今後も、まちづくり委員会のお力もお借りしながら、若い世代にも根本正先生の心が伝わり広がるよう創意工夫を重ねて活動を進めてまいりたい。

本日、顕彰フェスティバルが無事に開催できたことは、町づくり委員会の大きな支援のあったことからであり、深く感謝申しげたい。

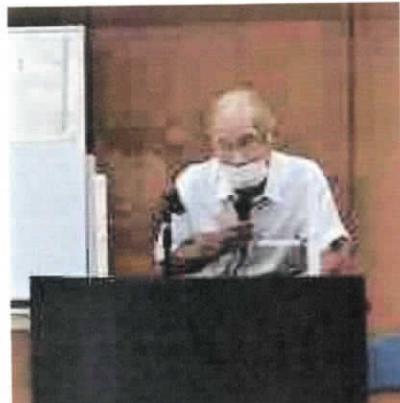
（3）講演

① 前会長増子輝雄氏

「学び続けてた青春・文教地区『清水原』」

根本正先生の学問への意欲と文教地区となった五台地区について述べたい。

根本家は東木倉村の庄屋であり、親戚に里美地区の庄屋豊田家があった。祖父に学問的因素があり、彰考館総裁を務める豊田天功とその子小太郎が身近にいた。学問への意欲を起こし、それの実践力が大成へ導いた。環境と実行力が不屈の政治家根本正を生み出した源である。



また、根本正の好奇心と新鮮な感動力は物事への動機づけの源泉である。これに実行力が伴って米国への留学となる。並みの行動力ではない。多くの意園舎のいたことも幸いであったが、支援者が表れるのも根本正の賢明さ・努力の表れである。

帰国に際して、欧州諸国をめぐってさらなる研鑽を積んだことも、彼の意欲の表れである。人はあくなき探求心をもち、その実践者でなければならない。我々が今日根本正先生から学ぶところは、ここにある。

五台地区は館内外から見ても教育機関が集中している地区である。明治22年（1889）の五台小学校創立以来、茨城学園、茨城女子短期大学校、茨城県立水戸農業高等学校、大成学園幼稚園、那珂市立五台幼稚園、茨城県立那珂高等学校、那珂市立ふれあいセンターなどが次々と創立してきた。まるで根本正の精神が呼び込んだかと思えるほどである。

その地名、「東木倉」「清水原（しみずっぱら）」「教育施設の充実」が全国的代表

書『角川日本地名大辞典』に掲載されている。驚くべきことである。

このような誇り有る人物と故郷を持つ我々は、先人の知恵を生かしながら、心豊かな地域づくりに励んでまいりたいものである。

② 理事仲田昭一氏

「五台村の尊王事蹟三題」

根本正は尊王家でもある。大正4年の大正天皇御即位大典に招かれて感激、その記念にと根本正・徳子夫妻の名を以て記念誌を発行している。

三題の一つに「植桜の記碑」の建立がある。現在は、国道118号の西木倉坂下に架かる山崎橋の袂、小場江用水路ののり面に建っている。元は、未舗装の国道沿い桜並木の途中に建っていたものが移転されたものである。日露戦争後、勝利を誇り驕りと怠惰が見られた国民を教諭するために出された明治天皇の「戊申詔書」を受けて、気風刷新に立ち上がった各地の青年団、西木倉戊申青年団が桜を植えて日本精神を取り戻そうとされたものである。

次は、昭和天皇が昭和4年11月に水戸で行われた陸軍特別大演習の際、かつて水戸藩の軍事演習場とされてゐた清水原一帯を、愛馬吹雪に跨って中台から東木倉・西木倉を御巡幸された記念誌と記念碑について。

記念碑は昭和11年11月に五台村の村民によって、小学校の正門近くに建立された。しかし、昭和20年の敗戦によってか、現在はその跡形もない。だれもその行方を知らない。語らないのか。GHQを恐れてのことか？

三つめは、平成28年に掘りこされた皇太子（昭仁親王：現上皇）の御誕生を記念した御影石製の道標建立である。五台村戊申青年団や田向青年団がお祝いとして建立した「道しるべ」が、国道118号線豊喰地区の拡幅工事中に、掘り出された。浅川清司社長の起点によって破壊されずに保護され、現在会社の敷地内に再建されている。同じく、GHQに配慮した破壊であろう。

このような事蹟を残すのは、那珂市内ではここ五台地区のみである。歴史と伝統を守り、この心を今日に生かしながらさらなる発展を遂げることを期待したい。

<質疑応答>

- ① 五台地区出身の根本正代議士、故郷を離れての生活であるため、地元での活動が見えにくいが、茨城県内での矯風会活動などかなりの活躍も結構見えてきている事実も認識しておきたい。
(県内の講演会記録などがかなり残されている)
- ② 高層気象観測所の設置に貢献した事実に感激したことがある。
(観測所の設置は明治43年の那珂湊沖の海難事故がきっかけである。最近関連の大舞台劇が演じられ話題となった。根本正先生の様々な活動・活躍を踏まえて地域の発展

に心がけていきたい)

(4) 閉会のことば 横地富子副会長

なお、会場には鴻巣地区の高畠操坂から寄贈された根本正先生の真筆「忠孝无二」と和歌「皆人の本のこころはますかがみみがかばいかで曇りはつべき」2点と市歴史民俗資料館および齋藤郁子さん作成の「根本正の生涯」が展示されました。

※ コロナ感染症の第7波が押し寄せる中、決断開催された根本正顕彰フェスティバルは、参加者の熱意を以て成功裏に終了した。実施したことの意義がある。地道な活動を続けてまいりましょう。



郷土が生んだ不屈の政治家
「根本正」顕彰フェスティバル

期日 令和4年8月28日(日)

会場 ふれあいセンター ごだい

日程

区分	時間	備考
1 開会のことば	13:30	
2 挨拶	13:35~	五台まちづくり委員会委員長 増子 健一
3 講演		根本正顕彰会会长 山田正巳
第1部 学び続けた青春・文教地区 「清水が原」	13:40~14:40	講師 顕彰会顧問 増子 振雄
第2部 五台村の尊王事績3題	14:50~15:50	講師 顕彰会理事・事務局長 仲田 昭一
4 質疑応答	15:50~16:00	
5 閉会のことば	16:00	

共 催 根本正顕彰会 五台まちづくり委員会

講演第一部

学び続けた青春・文教地区「清水原」

1. 生い立ち

根本 正は嘉永4年（1851）東木倉村（現 那珂市東木倉）で父徳孝・母はやの間に次男として生まれた。根本家は農業を営み庄屋を務める家柄であった。そして、水戸徳川家のために骨身惜しまず忠勤を尽くしていた。

正の祖父は学問的要素のあった人で、正が6～7歳の頃の少年時代に祖父より「読み・書き」を習った。正が9歳のときから神主の佐川伊豫之介の塾に通って学んだ。



2. 水戸に出る

正が13歳のとき、もっと上を目指して学びたいということで水戸に出て行くこととなった。正の父徳孝の従兄弟で「大日本史」編纂をする水戸彰考館の総裁であった豊田天功の家僕となった。豊田天功は当時水戸上市の新屋敷といわれる地（現在の水戸市立新荘小学校辺り）に屋敷を構えていた。天功に仕え、天功亡きあと長子の豊田小太郎に仕え学問、武芸等を学んだ。豊田小太郎が暗殺され、亡きあと水戸藩南御郡方役となる。

その翌年正が17歳のとき、水戸藩御郡方奉行服部潤次郎からフランスのパリ万博土産の「時計とマッチ」を見せられ大変驚愕し、それらを生み出した背景にある外国語（英語）を学ぼうと決意する。

3. 東京へ出発

正が20歳のとき水戸藩の役人を辞めて上京する。人力車夫をし、その後警視庁の巡査になり働きながら蘭学者簗作秋坪の「三又学舎」、翻訳者中村正直の「同人社」に学んだ。この中村正直との出会いがリスト教入信へのきっかけとなった。その後駅逕寮（外国郵便）に就職し、神戸、横浜局に勤務した。

横浜で働きながら「ヘボン塾」に入門し英語を習った。そして横浜の住吉教会で洗礼を受ける。こうして学びながら渡米の機会を探っていた。

東京に出てからの生活と学んだ塾

- 明治 4年 = 上京し人力車夫をしながら箕作秋坪の「三又学舎」に学ぶ
明治 5年 = 警視庁の巡査となる。中村正直の「同人社」に学ぶ
明治 7年 = 巡査を退職し駅逓寮となる。引き続き同人社に学ぶ
明治 8年 = 外国郵便も扱う神戸局に転勤する。同人社を退学する。
慶應義塾の分校というべき京都宇治の義塾に入り英語を学ぶ
明治 10年 = 横浜局に転勤する。ヘボン塾に学ぶ
明治 12年 = 米国に留学する

4. 米国留学

正が28歳のとき横浜郵便局に勤めるアメリカ人の紹介で渡米することになった。アメリカのオークランドの小学校に入学し、弁護士のバラスト一家で働きながら2年間で小学校を卒業する。続いてポブキンス中学校に入学し寄宿舎の給仕などをしながら4年間学んだ。中学校卒業後バラスト一家の紹介でバーモンド州の富豪ビリングス氏にお世話になり、バーモンド大学で4年間学んだ。卒業式には代表10名の1人に選ばれ英語で演説している。10年間のアメリカ留学で多くのことを学んだ。

留学を終えてアメリカからの帰路見聞を広めるため、ビリングス氏の支援を受けてイギリス、ドイツ、フランス、イタリアの4カ国を視察して日本に帰国する。

5. 政治家を目指す

米国留学から帰国後帰郷しているとき、板垣退助伯爵から電報で愛國公党（後の政友会）への誘いを受けた。そして入党し政務調査員となり調査研究、各地への遊説、翻訳書の出版などをしながら政治家を目指すこととなる。

明治23年（1890）第1回総選挙、続いて明治27年（1894）の第3回総選挙に立候補するもいづれも落選する。

明治31年（1898）第5回総選挙に立候補し初当選を果たす

根本正と水戸学

水戸学との出会い　根本正の生涯に大きな影響を与えた水戸学、その學問との出会いについて根本は「回顧八十一年」の中でおよそ次のように語つてゐる。

一三歳の時分に水戸の城下へ出で、豊田天功の家

僕・家来となつた。天功は親の従兄弟に当たり、「大日本史」を編さんする史館「彰考館」の總裁であつた。「向こうは士族、私は百姓で下僕即ちいわば家来」の関係であつた。そのうちに天功先生が

亡くなられので、お子さんの小太郎先生に学ぶことになつた。家来は下駄を履くことが出来ない、雨天の時には草鞋を履いてお供をする。士族が来れば、草鞋を脱いでお辞儀をしなければならない。

大変な上下関係の違いがあつた時代、ちょうど元治元年（一八六四）のことであつた。

この頃、日本は開國・鎖国をめぐつて混乱を深め、水戸藩内でもその影響から天狗派と諸生派に分かれ

て対立が激しくなつていた。それはやがて元治元年（一八六四）の筑波山事件へと発展していった。この

争乱は、天狗派においては武田耕雲齋の家族をはじめ多数の藩士が処刑され、反対に諸生派もまた家老市川三左衛門が逆さ磔にされるなど、残酷な仕打ちの繰り返しを生んだ。その対立は、領民をも巻き込んで、後々まで怨恨が残る負の遺産となつていくのであるが、そのような水戸藩の物騒な時代の中で根本は多感な少年時代を過ごしたのである。学問的にも、精神的にも、

水戸は根本の一生に大きな影響を与えたのであつた。

義公様御壁書　さらにより具体的に光圀を尊敬して

いたことを示すものは、次のような「義公様御壁書」である。根本正はこれを名刺の裏に印刷し、自分の信念として多くの人々に示していた。

一 苦はたのしみの種、樂は苦のたねと知るべし

一 主人と親とは無理なるもの（従わねばならない）と思へ、下人は足らぬもの（物わかりが悪い）と

知るべし

一 子ほど（子が親を慕うように）親を思へ、子無きものは身にた比べる（自分を他と比較し反省する）ちかき 手本を知るべし

一 おきてに怖ぢよ（よく守り）、分別なきものにをぢよ（十分注意せよ）、恩を忘るる事なかれ

一 慾と色と酒とをかたきと知るべし

一 朝寝すべからず、嘲の長座（長い無駄話）すべからず

一 小なる事は分別せよ、大なる事は驚くべからず

一 九分はたらず、十分はこぼると知るべし

（常に最高を目指して努力をせよ。しかし、これで達成したと満足してはならない）

一 分別は憇忍にあるべしと知るべし（大事な事は人を許す広い心を持つこと）

（根本 正伝より）

根本 正「青少年時代の年表と主なできごと」

西暦(年号)	年齢	根本正関係	国内の主なできごと
1851年 (嘉永4年)		東木倉村(現那珂市東木倉)に生まれる	アメリカペリー艦隊が浦賀に来港(1853年)
1857~8年 (安政4~5年)	6~7歳	祖父より読み・書きを学ぶ	
1860年 (万延元年)	9歳	神主佐川伊豫之介の塾に学ぶ	桜田門外の変(1860年)
1863年 (文久3年)	12歳	豊田天功の家僕となる	
1864年 (元治元年)	13歳	豊田天功死去 子息豊田小太郎に仕える	藩内抗争 天狗・諸生の乱 水戸「天狗党」として西上し、加賀藩に降伏(1864年)
1865年 (慶応元年)	14歳	豊田小太郎京都で暗殺される	武田耕雲斎・藤田小四郎ら352名処刑される(1865年)
1867年 (慶応3年)	16歳	水戸藩南御郡方役人となる	大政奉還(1867年)
1868年 (慶応4年)	17歳	水戸藩東御郡方奉行服部潤次郎からパリ万博土産の時計とマッチを見せられ、カルチャーショックを受ける	
1869年 (明治2年)	18歳		諸生党の重鎮市川三左衛門処刑される(1869年)
1871年 (明治4年)	20歳	役人を辞めて上京し、働きながら学ぶ 以下アメリカ留学へと続く	

地名「東木倉・清水原～教育施設の充実」

ひがしきのくら 東木倉〈那珂町〉

那珂川下流左岸に位置する。先土器時代～縄文時代の東木の倉遺跡がある。文禄4年7月16日の佐竹義宣知行充行状写「一、百五拾石也〈那賀郡内〉東木倉の内」と見え(大綱嘉兵衛文書／家蔵文書)、佐竹氏家臣大綱氏の知行地であった。

〔近世〕東木倉村 江戸期～明治22年の村名。常陸国那珂郡のうち。はじめ佐竹氏領、のち慶長14年からは水戸藩領。村高は、寛永12年「水戸領郷高帳」297石余、「元禄郷帳」271石余、「天保郷帳」293石余、「旧高簿」403石余。「水府志料」によれば、常葉組に属し、戸数15、村の規模は東西4町余・南北8町余、小場江用水の用水渠(長さ242間)がある。神社は吉田明神(新編常陸)。明治4年茨城県、同11年那珂郡に所属。明治22年五台村の大字となる。

〔近代〕東木倉 明治22年～現在の大字名。はじめ五台村、昭和30年からは那珂町の大字。明治24年の戸数43・人口1301。昭和42年大成学園茨城女子短期大学設立。昭和36年一部が水戸市中河内町・柳河町となる。

教育施設の充実 当町域からは、根本正のように、アメリカの大学で学んで帰国した後、明治31年から大正13年まで、26年間代議士として活躍し、「国民教育授業料全廃の建議案」「小学校教育費国庫補助法案」を提出して議決させた人物も出ている。明治41年菅谷村ほか10数か村で、学校組合として菅谷農学校(乙種)が設置された。財政的理由で大正11年廃校となるが、那珂・久慈・東茨城各郡から多くの子弟が学んだ。第2次大戦後の学制改革により中学校は創立されたが、高校以上の教育機関はなかった。昭和42年、東木倉に大成学園茨城女子短期大学が設置されたことは、当地の教育・文化の向上に刺激を与えることとなった。同45年県立水戸農業高校が西木倉に移転し、農業教育推進の上で大きな展望を開くこととなった。

(角川日本地名大辞典より)

しみずっぱら 清水原〈那珂町〉

那珂町南部の五台地区にある原。標高30m前後で那珂台地の一部をなす。南側は段丘崖をなし、そこから広大な沖積平野が広がって、両者の境界付近を小場江用水が流れる。「水府志料」後台村の項に「株野 拾七町歩余有。中台、東木倉、西木倉、豊喰等大方入会の地にして曠野也。都而清水原と云。府下の土此野に出て火矢、烽燧等の火術を学ぶ所とす」とある。徳川斉昭の時代には練兵場・射撃練習所であった。中台北部には明治末頃まで長さ200mの土壘があり鉄砲場とよばれていた。明治期には草刈入会地をめぐり、那珂川沖積低地の坪方の中河内銭・下国井・西木倉など5か村と台地上の野方の東木倉・五台・豊喰村など4か村との間に争いが起こり、明治14年に県知事に調停を申請したが解決まで数年を要した。これを清水原事件という。現在は水戸市の近郊地域として都市化が進み、高校や短期大学も進出し、文教地区を形成。

五台地区「清水原」に集結する教育施設

平成22年11月30日現在調

教育施設名	創立又は移転	生徒数	水郡線利用通学者	備考
那珂市立 五台小学校	明治22年 東木倉地内に創立 大正15年 現在地に移転	483名	—	
茨城県立茨城学園	明治43年 水戸市内に創立 昭和11年 水戸市より現在地 に移転	60名	—	児童自立 支援施設
茨城女子短期大学校	昭和42年 現在地に創立	170名	15～ 20名	
茨城県立 水戸農業高等学校	明治28年 水戸市内に創立 昭和45年 水戸市より現在地 に移転	900名	全学年で 243名	
大成学園幼稚園	昭和46年 現在地に創立	120名	—	
那珂市立 五台幼稚園	昭和49年 現在地に創立	35名	—	
茨城県立 那珂高等学校	昭和60年 現在地に創立	480名	全学年で 212名	
那珂市立 ふれあいセンター ごだい	平成21年 現在地に創設	—	—	地域交流 社会教育 活動拠点

教育施設が集結する五台地区周辺図

第一系院

那珂警察

316

セイタ

那珂IC
常磐自動車道
65

常磐

春日神社

JAひたちなか
那珂直営所

天満神社

坂本家のモチ

118

県中央
水道事務所

諏訪神社

県立水戸農業高校

五台幼稚園

大成学園幼稚園

清水寺
清水寺のスギ
潤水神社
根本正経の生家

吉田神社
吉田神社のツリヅキ

息栖神社

ゆたか保育園

季子善童与童の墓

県立那珂高校

五台小学校

茨城女子短期大学

ふれあいセンターごだい

県立茨城学園

33

- 7 -

那珂市役所
中央公民館

一の関ため池親水公園

曲がり屋

上菅谷駅西公園

菅谷西幼稚園

高橋家のカヤ

菅谷西小学校

17

18

菅谷西小学校

春日神社

中菅谷駅

みの内北公園

みの内中央公園

那珂第一中学校

千鹿島神社

かしま台保育園

下菅谷駅

三島神社

後台駅

ごだい保育園

38

セイタ

菅谷

保育所

宮の池公園

那珂中部

土地改良区

那珂市消防

東消防署

正不動院

不動院のガヤ・イチヨウ

とんがりはつと

那珂市立図書館

那珂市

商工会

菅谷幼稚園

総合保健福祉センター

ひだまり

正覚寺

菅谷小学校

正覚寺の

千鹿島神社

かしま台保育園

(測量用標識等が付いており)

五台村の尊王事蹟 3題

1 「植桜の記」碑建立 （大正4年：1915）

— 西木倉戊申青年同志会の小場江堤上および街道沿い江の桜木の植樹 —



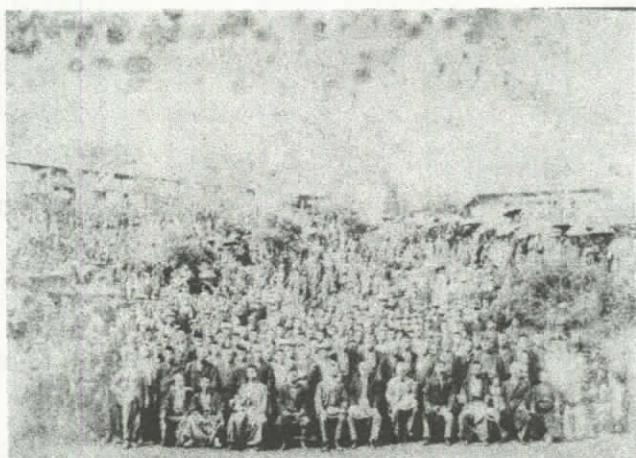
「植桜記碑」は、大正4年（1915）11月、西木倉青年同志会によって小場江用水路堤上に建立された。明治38年（1905）に終結した日露戦争は辛勝であった。しかし、内実を知らされなかつた国民は大勝と信じ、ポーツマス条約に納得しない人々は日比谷公園で講和反対国民大会を開き、それは焼き討ち暴動に発展した。戦勝に酔つた国民の間には、やがておごりや怠惰、浪費の風潮が現れた。それを憂えられた明治天皇は、明治41年（1908）10月13日、いわゆる「戊申詔書」を発布せられ、国民は心を一つにして軽佻浮薄を正し、質素儉約・勤勉出精に努めるようにと呼びかけられた。

これを受けて、詔書の精神を弘め実践するために全国的に地方改良運動が展開された。具体的には地域林の造成、健全財政への納税推進、生活改善、勤儉貯蓄、時刻励行などであり、「刻苦精励」を基とする気風の刷新運動である。その実践組織として、各地に「戊申青年団」などが設立された。「西木倉青年同志会」もその一つである。

この同志会は、共同一致して村事に尽くそうと決議し活動に努めた。時あたかも大正4年11月10日、大正天皇御即位の大典が行われた。会員一同は、その記念事業として小場江用水路堤上および西木倉台から中河内に続く新街道沿いに桜樹数百本を植樹し、碑を建てその意を後世に伝えようとしたのである。

碑文は水戸学者である栗田勤が記した。いわく、「桜は日本特有の名木にして、開花すれば爛漫・清艶、芳香は四方に満ち溢れ、日本魂の証しである。ああ、これより以降、この樹の繁茂し、日本の永遠を祝すことは、国民の赤誠を表すことでもある。村民こそぞて戊申詔書の精神を遵奉して美風を養えば、単にこの地域のみならず、国家の發展も期すことができよう。そうすれば、この事業も日本魂の發露となり、この桜と同様に永くその美を伝えてゆくことであろう（要約）」と。

この桜樹はやがて成木となり、行き交う人々は、春爛漫の花を愛で、繁茂する青葉で夏の炎暑を避け、秋には紅葉を楽しみ、冬には天空に伸びる樹



(写真：西木倉戊申青年同志会一同)

枝の群れに勇氣を得たのである。この碑は、国道 118 号沿道西側に桜樹に囲まれて建っていたが、昭和 40 年（1965）初め、国道の拡幅工事により山崎橋西側の杉林内に移動、桜樹も伐採されて往時の面影は残っていない。

【植桜の記】

戊申詔書の渙發せらるるや天下靡然として風動し、人々みなよく聖旨を奉じ、國運の發展を期せざるものなし、地方到るところ青年会の設けあるもまた、専ら遷善矯弊の実効を挙げ、以て聖旨に応えんと欲すればなり、茨城県那珂郡五台村西木倉、既に青年同志会なるものあり、その戊申詔書を拝讀するに及び感激措かず、更に規約を定め共同一致以て力を村事に尽くし、その施設するところ著しく觀るべきものあり、ことし乙卯十一月今上天皇まさに即位大嘗祭を行わんとす、實に國家の大典なり、會員あい議し、桜樹数百株を西木倉沿道の小場江堤上に移植し、以て大典の記念に供せんと欲す、乃ち力を協せてその労に服し、日ならずして桜樹林立し、實に邑里の美觀となる、ここにおいてか碑を立てその事を記さんと欲し文を余に嘱す、余曰く、善かなこの挙、それ桜は神州特有の名木にしてその開花するや爛漫芬芳、清艶秀絶にしていわゆる日本魂の表章なり、ああ自今以後、この樹の繁茂により、恭んで宝祚の無疆を祝し以て臣民の赤誠を表し、またよく戊申詔書の聖旨を遵奉し、これ義以て勤儉醇厚の美風を養成せば、則ち豈ただに遷善矯弊の実効を挙ぐるのみならんや、國運の發展もまた以て期すべきなり、然れば則ちこの挙の如きもまた日本魂の發顯にして、かの桜花と永くその美を嫋ぶべし、と、

大正四年歳次乙卯秋

水戸 栗田勤撰文并びに書及び篆額

（原漢文）

2 「永念巡幸の碑」建立（昭和 5 年：1930）

一 陸軍特別大演習と昭和天皇の五台村御巡幸 一

この昭和天皇の御巡幸は、昭和 4 年（1929）11 月 15 日から 18 日までの 4 日間の日程で行われた陸軍特別大演習の際になされたものである。これを記録した「五台村御巡幸紀事」は、御巡幸があつた年から 7 年後の昭和 11 年 9 月 30 日に、五台小学校の黒沢哲二校長が当時の記録や聴き取りによりまとめたものである。

「永遠ノ記念」

昭和四年十一月水戸を中心として常総の野に陸軍特別大演習を挙行せられ、畏くも聖上陛下には、茨城県庁の大本營に行幸遊ばされ、親しく四万余の貔貅を衛わせ給う。

次で十一月十八日水戸高等学校賜饌場より御還幸遊ばされた。

陛下には、直に御愛馬吹雪に御召しになり、午後三時大本營を御出門、万代橋を渡らせられ、青柳を経て、中台並木より左折し、所謂通学道路を一直線に、学校東側道路を御通りになられ、住宅裏へ御出で、午後三時四十分本校正門前を御通過遊ばされ、天神窟に向かわせられ、西木倉高台の畠道を進ませ給い、東木倉坂道を御下りになられ、観音堂側より再び学校に向かわせ給い、松林中頃より御引き返しになり、林沿いの細道を進ませ給う。途中檜枝垂れ蔓り、陛下御親から避け給いしと云う枝、今も切らずにあり。

かくて中台県道に御出での上、御機嫌麗しく大本營に御還幸遊ばされたり。

以上は、当時の奉拝者の講話と簡単なる謹記とを綜合し、この光栄を永く後代に伝えんと欲し、ここに

謹んで之を記す。（原文はカタカナ入り）

昭和十一年九月三十日

校長 黒沢哲二

ひきゅう 魏貅（屈強な軍人たち）

「巡幸永念之碑」

昭和四年十一月十八日

天皇陛下には高松宮殿下御同伴にて親しく本校附近を御巡幸遊ばされた本村の光栄を永く伝えんが為め、校門側に記念碑を建立し、毎年十一月十八日を御巡幸記念日と定め、御聖徳を偲び奉る。

昭和五年 九月十五日工事着手

同 十月八日建碑竣工

同 十一月三日建碑式挙行

揮毫 元水戸中学校長 菊池謙二郎氏

碑文（正面）

「巡幸永念之碑」

菊池謙二郎謹書碑陰文

菊池謙二郎謹書

（裏面）

昭和四年十一月十八日觀兵式終了後、天皇文武官三十餘人を從へて卒かに此地に出御あり、こうそんあまね 關村遍
く鳳輦の轍を印せられ芻蕘齊しく聖慮のしうぎょうひと せいりょ かたじけな 添きに感泣す
乃ち永く之を後昆に傳へむと欲志村費を以て爰に此碑を建つ

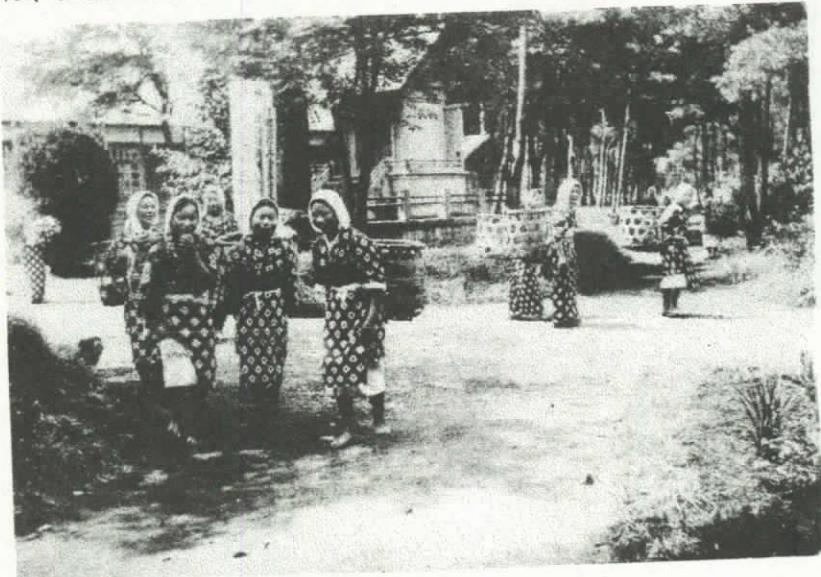
昭和五年十一月

五臺村住民 （原文はカタカナ入り）

芻蕘 くさかりときこりから微賤・庶民の意

五台尋常小学校と巡幸永念之碑

現在の水戸農業学校側に正門がありました。写真（昭和10年代：塩野忠氏提供）からは校門の門柱が見え、右手に奉安殿が見えます。奉安殿は、天皇・皇后両陛下のご真影と教育勅語を安置するために昭和12年頃から全国の小・中学校に造られたもので、火災や盗難を防止し、また保存・尊厳の維持のために当時としては珍しい鉄筋コンクリートまたは土蔵で造されました。その上大きく頑丈な鉄製の扉が付けられ、さらに周囲を鉄の鎖をわたした門で囲んでありました。多くは一目でわかる校門近くに建てられ、児童・生徒は登下校の際には必ず最敬礼をしたものです。この五台小学校の正門・奉安殿付近の写真には肝心の「記念

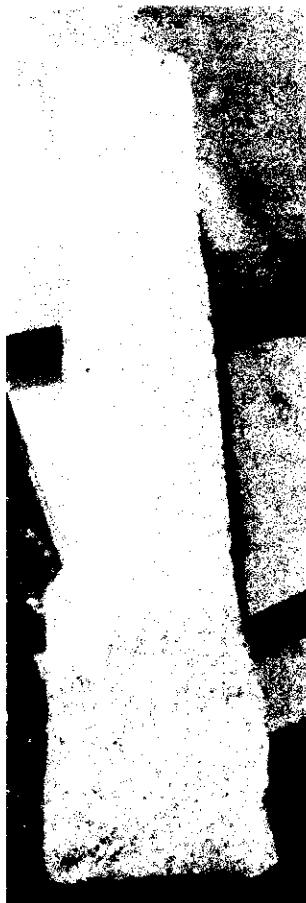


碑」は見えませんが、根本三代造氏の記憶では、この辺りに大きな碑が立っていたという。

さらに、この御巡幸の大きな記念碑（根本三代造氏の記憶ではおよそ縦3㍍、横1.5㍍）が、五台小学校の正門脇、奉安殿と並んで立っており、毎朝奉安殿とこの記念碑や二宮金次郎の像を拝して校舎に入ったこともお話をいただいた。ただし、現在はこの記念碑は小学校敷地内には見当たりません。察するに、奉安殿解体の折に撤去されたのかも知れません。占領政策への過剰な反応の一つであったかも知れません。全国的には、昭和5年の陸軍大演習に関する記念碑は数多く残されていますが、はたしてこの碑は何処へ行ってしまったのだろうか。

3 「皇太子殿下御降誕記念の道標」（昭和9年：1934）

— 浅川清司さんの機転が文化財（歴史資料）を救う —



本年2月初め、豊喰地内の国道118号交差点拡幅工事現場から丈104cm、幅18cmの石柱が掘り出された。浅川さんが「皇太子」の文字を見いだし、もしかして貴重なものかと歴史民俗資料館に連絡、その結果昭和8年12月23日の皇太子殿下（今上天皇）のご誕生をお祝いして、翌9年10月に建立されたものと判明した。

建立者は五台村戊申青年会と田向青年団、「道しるべ」として「菅谷・額田ヲ経テ太田方面」「兵営ヲ経テ赤塚・友部方面」「本村小学校ヲ経テ西木倉・国田方面」と刻まれています。倒して埋められたのは、敗戦後連合軍を恐れてのことではないかと推定されています。

浅川さんは、敷地内に再建して大切に保存されています。

【道標】

皇太子殿下御降誕記念 昭和九年十月

五台村戊申青年会 田向青年団

「菅谷・額田ヲ経テ太田方面」

「兵営ヲ経テ赤塚・友部方面」

「本村小学校ヲ経テ西木倉・国田方面」

禁酒
会

子どもにお酒を飲ませない

100年前にそれを法律にした日本人

2022年

11月16日(水)

午後1時半～3時半（1時開場）

@矯風会館1階ホール (裏面に地図)

講師：加藤 純二さん

医師、根本正顕彰会顧問

根本正顕彰会について「根本正の不屈の精神を地元で引き継ぐ顕彰会」

お話：山田正巳さん（根本正顕彰会会長）

参加無料



スーパー・コンビニ等でお酒を買うとき、「未成年ではない」と、意思表示を求められます。その根拠となる「未成年者飲酒禁止法」の制定・施行から百年の今年、子どもの人権に尽力した根本正（ねもとしよつ）代議士のこと、ぜひ知ってください。大人はお酒を飲めるのになぜ子どもはダメなのかな？ちなみに、お酒を飲んでも良い年齢は一八歳ではなく二〇歳です。

共催：公益財団法人日本キリスト教婦人矯風会、一般財団法人日本禁酒同盟 後援：根本正顕彰会

問合せ：電話 03-3361-0934 FAX 03-3361-1160 (きょうふうかい)

Eメール kyofukai-somu@festa.ocn.ne.jp

講師紹介

加藤 純二 (かとう じゅんじ)

長野県飯田市出身、東北大学医学部卒、仙台市宮城野区の内科医院で診療。特にアルコール依存症の早期発見・治療に専門を持ち、傍ら未成年者飲酒禁止法を帝国議会で成立させた代議士・根本正について調べ、『根本正伝 未成年者飲酒禁止法を作った人』(銀河書房)を出版した。最近、自分の診療経験をまとめた『内科開業医のアルコール依存症診療記』も出版した。日本アルコール関連問題学会・会員。日本禁酒同盟・元代表理事、仙台郷土研究会・理事。



根本正顕彰会

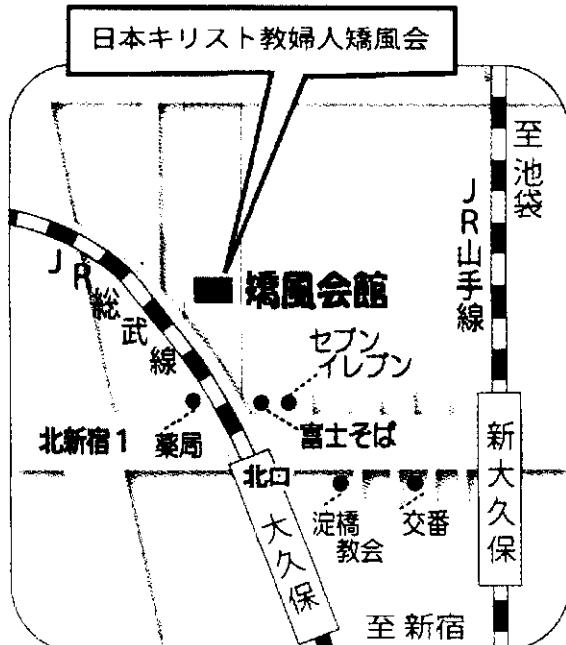
根本正は1898(明治31)年に衆議院議員となり、未成年者飲酒・喫煙禁止法のほか、義務教育無償化、水郡線設置などに尽力した。加藤純二医師執筆の伝記の寄贈をきっかけに、1997年10月に顕彰会が発足。会報発行、公開講座、ゆかりの地を訪ねる旅などを行っている。年会費3,000円。
問合せ：事務局長 仲田 昭一 〒311-0121茨城県那珂市戸崎3486-2 電話：090-8038-2087

公益財団法人日本キリスト教婦人矯風会

米国の禁酒運動に端を発すが、女性の地位向上をめざす矯風会という名称で1886年に発足。創設期のメンバーは、禁酒同盟のあゆみに登場する者多数あり。根本正の妻の徳子も矯風会員。2012年に公益移行後は、女性の人権と福祉を活動の柱として、女性と子どもが安全に生きられる社会の実現という視点で、アティクション問題にも取り組んでいる。DV女性のシェルターを都内某所で運営。東京都新宿区百人町2-23-5 電話03-3361-0934

一般財団法人日本禁酒同盟

日本禁酒同盟は、1887(明治20)年、東京・横浜の禁酒会の活動を母体として発足。一貫して酒害の啓発と予防教育に取り組み、アルコール依存症当事者たちの例会〈断酒修養会〉とも連携してきた。2012年に一般財団法人に移行。断酒修養会メンバーの体験談をまとめた『初の断酒会を拓き断酒修養会を営む』を発行(2016年)。武蔵野市に資料館を有す。東京都武蔵野市西久保1丁目8-2 電話0422-54-8555



JR大久保駅北口下車 徒歩2分。改札を出たら道路(大久保通り)を渡る。ドラッグストアと富士そばの間の細い道に入る。頭上にはJRのガードあり。約20メートル先の右手のクリーム色4階建ての建物が矯風会館。

JR新大久保駅からは徒歩5分。

※会場の都合上、濡れた傘は入り口にてお預かりいたします。
ご了承ください。

※会場入り口にて検温・消毒をお願いします。

※コロナ禍の状況により中止することがあります。
参加予定の方は前日までに矯風会へ、電話・FAX
・Eメールでお申し込みお願いします。